広島芸術学会活動報告

二〇一三年七月一日～二〇一四年六月三十日

▼平成二十五年七月十三日（土）

広島県立美術館地階講堂において平成二十五年度総会、第二十七回大会を開催した。

総会は菅村亨事務局長の開会のことば、青木孝夫会長挨拶の後、末永航氏を議長に選出し議事を進めた。第一号議案、平成二十四年度事業報告並びに決算報告について、資料にもとづき、事業報告が青木会長、決算報告が菅村事務局長から説明され、続いて松田弘監査から監査報告があり、審議の結果、承認された。第二号議案、平成二十五年度事業計画並びに予算案について、資料にもとづき、事業計画が青木会長、予算案が菅村事務局長から説明があり、審議の結果、承認された。

議事審議の終了後、青木孝夫会長挨拶があり、閉会した。

大会は三件の研究発表とシンポジウムを行った。研究発表は①上野仁（広島大学総合科学部特任講師）「裂開―亀裂―逃走としての芸術作品―ハイデッガー―アドルノ―ドゥルーズ＝ガタリにおける思考しえないものの生成力」、②石井祐子（日本学術振興会特別研究員／広島大学）「その道は、長いというより広い ―一九三〇年代後半のコーク・ストリートにみるイギリスにおけるシュルレアリスム受容の一側面―」、③福田道宏（広島女学院大学国際教養学部准教授）「それを書くというべきか、描くというべきか―加藤信清の究極の文字絵と生涯」。

シンポジウムは「芸術と教育を考える―芸術教育からアート教育へ」をテーマとし、樋口聡（身心文化論、美学、教育思想）による基調報告「アート教育とは何か」に続き、加藤宇章（造形作家、アトリエぱお代表）、寺内大輔（作曲、即興演奏、音楽教育）、竹村信治（日本古典、説話文学研究）によって、美術、音楽、文芸の領域における事例が報告される形で進められた。

また、七月十二日付で『藝術研究2013』（年報第二十六号）を発行した。

▼平成二十五年八月十日（土）

会報第一二四号を発行。巻頭言は船田奇岑（アーティスト、電子音楽家、美術表装「鬼笙堂」代表）の「ネットコミュニケーションとアートの行方」。第二十七回大会の研究発表の報告は、①上野仁の発表を桑島秀樹（広島大学大学院総合科学研究科准教授）、②石井祐子の発表を谷藤史彦（ふくやま美術館学芸課長）、③福田道宏の発表を城市真理子（広島市立大学国際学部准教授）が執筆し、シンポジウムの報告は馬場有里子が執筆した。また、高原小夜「共存共生」、袁葉「若葉が輝くとき」のエッセイ二編を掲載した。

▼平成二十五年九月二十一日（土）

「文化財と伊東豊雄建築の大三島周遊」と題して第一〇四回例会

（野外例会）を開催した。午前八時二十分にJR広島駅新幹線口をバスで出発し、一鍬田委員、谷藤委員の引率のもと、大山祇神社宝物館、ところミュージアム大三島、伊東豊雄建築ミュージアム、岩田健 母と子のミュージアム（設計：伊東豊雄）を見学、周遊した。

▼平成二十五年十一月二十二日（金）

会報第一二五号を発行。巻頭言は能登原由美（広島文化学園大学非常勤講師）の「ペンデレツキ生誕80周年を迎えたポーランド」。第一〇四回例会の報告を松田弘（前広島県立美術館学芸課長）が執筆した。この他、吉川昌宏（蘭島閣美術館学芸員）の「蘭島閣ギャラリーコンサートについて」、馬場有里子（エリザベト音楽大学）のコンサートレポート「邦楽×デジタルアートの試み 第2回：琵琶・箏で描く現代」、古谷可由（公益財団法人ひろしま美術館学芸員）の美術館レポート「海外美術館事情～ル・アーヴル編：展示室での光」を掲載した。

▼平成二十五年十二月二十一日（土）

ひろしま美術館講堂において第一〇五回例会を開催した。研究発表は①重藤嘉代（ウッドワン美術館学芸員）「ファン・ゴッホの初期作品における色彩および技法―《農婦》の非破壊科学調査の内容について」、②楊小平（広島大学大学院国際協力研究科 客員研究員）「廃墟／遺構を観光する―ダークツーリズムと『美』的体験のはざま―」。例会終了後、懇親会を開いた。

▼平成二十六年二月八日（土）

会報第一二六号を発行。巻頭言は末永航（広島女学院大学教授）「都市の記憶を繋げるために」。第一〇五回例会の研究発表の報告は①重藤嘉代の発表を農澤美穂子（広島大学大学院総合科学研究科）、②楊小平の発表を土肥幸美（広島芸術学会会員）が執筆した。また、袁葉（広島大学）のエッセイ「有朋自遠方来」、古谷可由（公益財団法人ひろしま美術館学芸員）の美術館レポート「海外美術館事情～パリ編2：展示壁面の色」を掲載した。

会報一二六号から用紙の色を変更し、また、封筒のサイズ、色、デザインも変更した。

▼平成二十六年三月一日（土）

広島大学総合科学研究科／総合科学部（東広島キャンパス）教養教育本部棟、第一会議室において、第一〇六回例会を開催した。研究発表は①ロナルド・G・スチュワート（県立広島大学生命環境学部准教授）「明治後期諷刺漫画における病気の表象：『東京パック』と梅毒を中心に」、②田中伝（海の見える杜美術館学芸員）「『図本叢刊』の成立とその周辺」。

▼平成二十六年四月二十日（日）

会報第一二七号を発行。巻頭言は一鍬田徹（広島大学大学院教授）〈公開シンポジウム「藝術の腐葉土としてのダークサイド」パネリストとして〉。第一〇六回例会の研究発表の報告は①田中伝の発表を廖偉汝（広島大学大学院総合科学研究科）、②ロナルド・G・スチュワートの発表を川添京（広島大学大学院総合科学研究科）が執筆した。また、頼　冠樺（広島大学大学院総合科学研究科博士課程前期修了、元福武財団犬島精錬所美術館スタッフ）の展覧会・イベント評「2013年瀬戸内芸術祭X維新派X犬島」、能登原由美（「ヒロシマと音楽」委員会）の演奏会評「下降する時代とともに～細川俊夫《星のない夜―四季へのレクイエム》広島初演を聴いて～」を掲載した。

▼平成二十六年五月十一日（日）

尾道市立美術館において第一〇七回例会を開催した。この例会は同美術館で開催中の「平木コレクション　美しき日本の風景――川瀬巴水、吉田博を中心に――」展の関連企画「〈風景と絵画〉をめぐって」として催された。青木孝夫会長の挨拶後、次の三つの講演ならびに質疑応答がなされた。①末永 航（広島女学院大学国際教養学部教授）「ヨーロッパの風景画・風景版画」、②森山悦乃（公益財団法人平木浮世絵美財団主任学芸員）「近代日本の風景版画」、③范叔如（アーティスト）「私の風景画について」。

▼平成二十六年六月二十七日（金）

会報第一二八号を発行。平成二十六年度総会・第二十八回大会のスケジュール、研究発表要旨、公開座談会などの案内を掲載した。第一〇七回例会の報告「美術展関連企画：〈風景と絵画〉をめぐって」を農澤美穂子（広島大学大学院総合科学研究科）が執筆した。また、柿木伸之（広島市立大学国際学部准教授）の劇評〈「そっくり」の深淵へ――このしたPosition!!リーディング公演「人間そっくり」を観て――〉、青木孝夫（広島大学）の報告「藝術学関連学会連合会第9回公開シンポジウム」を掲載した。

※文中、敬称を略させていただきました。また、肩書きは当時のものです。

◆会員状況

平成二十六年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員一八六名（一般会員一五〇名、学生会員三六名）

事務局

広島芸術学会会則

（名称）

第1条　本会は、広島芸術学会（Hiroshima Society for Science of Arts）と称する。

（目的）

第2条　本会は、芸術諸分野についての研究と発表を行うとともに、その活動を通じ会員相互の連帯と親睦を図ることを目的とする。

（事業）

第3条　本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

（1）年次大会及び例会の開催

（2）研究情報誌及び会報の発行

（3）芸術諸分野に関する展覧会、演奏会等の開催

（4）国内外の関係団体との交流

（5）その他、本会の目的を達成するために必要な事業

（会員）

第4条　本会の会員は、第2条に定める目的に賛同する者をもって組織する。

2　会員は、一般会員、学生会員、特別会員及び法人会員とする。

3　本会への入会は、所定の会費の納入及び委員会の承認を必要とする。

4　本会の会費を3年以上滞納した者は、会員資格を喪失する。

5　本会を退会しようとするときは、会員本人がその旨を事務局に申し出ることをもって足りる。

6　本会の信用と名誉を著しく傷つけたと認められる会員は、委員